

私が幼児教育のことや、視聴覚教育のことや、特殊教育のことを、熱心にやろう、と思ったのが、小児まひのおかげである、といつたら、人は信用するであろうか。

はつきり、この足はなおらないと、自覺したとき、いちばん深く悩んだことのひとつはこれから先自分は何をやって生きていか、であったことはいうまでもない。生きていく、ということばは、生物的に自分や家族を支えていくということから、自分

に遠足についていくことも、大きな生徒といつしょに旅行に出ることも不可能であつた。これで先生がつとまるだろうか。むしろ、辞職して坐つてやるような仕事に転ずべきではなかろうか。と考えているうちに、足が少しぐらい不自由でも、主事や校長ならやれるではなかろうか、と利己的な考え方でなかつたとはいきれないが、考えるようになつた。しかし、それだけに、自分の分を知つて、どんなことでも可能なことは全力をつくしてやろうということ

と、せっかくこうした仕事にあるときなのだから、初等教育のことを一生やろう、と思うようになつた。しかも、そのうちでも、外の人たちがあまり重要視しない部分をやつていこう、すでに初等教育自体が世間から重んぜられているとはいえないであるが。

の人生の意義をどういう点に見出すか、といったものまでを含んでいっているのである。

私はそのとき附属小学校の主事として、新教育運動をやろうとしていた。足がこうなつて、も早や、こどもたちといつしょ

つたのみ日記(7)

——小児まひ その三——

やってみよう、といったものが、幼児教育であり、特殊教育であり、また、視聴覚教育であつたに過ぎないのである、ともいえるのである。

生きがいを見出す、ということばがあるが、私はこうしたところに、文字通りの生きがいを見出すようになった。何もかも順調にいつて、からだにも心にも欠陥なしにいる人たちが、こういうことばのほんとうの感じがわかるものだろうか、とふと思つてもみる私ではあるが。

二、三年前に、高血圧を宣告された憂うつも、小児まひのときと似たような経路で、通り抜けようとしている。血圧がたかいことを知つていて、それを苦にやまず、かえつてそれを利用して、からだを用心していく、というのは、私がすでに小児まひで習いおぼえたてである。だから、私が案外元氣でいるのも、血圧が高いせいだ、といったことになるかもしれない。ある。

坂元彦太郎